

詩編 15 篇の黙想 どのような人が、主のみ前に共に生きうるか？ (2020 年 5 月 6 日分 TM)

巡礼者たちが、エルサレムにいよいよ到着した時のことを黙想しよう。途中に様々な困難もあったことでしょう。むろん、感謝と喜びも。「どのような人が、主なる神の幕屋に宿り、聖なる山に住むことができるのでしょうか」と門番、祭司あるいは聖歌隊のソリストが歌います。詩篇 24:3-5、イザヤ 33:14-16、ミカ 6:6-8 に同じような呼びかけが記録されています。エルサレム神殿ではなく、ここでは「幕屋」と言われています。神殿建設後、固定された場ではなく、民衆の移動とともに移動し、民衆のただ中であつた「幕屋」を思い起してのことでしょうか？ 私たちの場合はしばらく行くことができないうちの教会での礼拝でしょうか？ 詩編 15 編を以上のような想いで読みましょう。

・この詩を読んだ率直な感想は、このような人はいない、自分は少なくともこのような人になれないというものでしょう。しかし、いわゆる「山上の説教」と同じように、その戒めを守ることができるかが問題ではなく、神の恵みによって赦されている者が、その応答として神から望まれている課題であり、「守らせていただく」のです。信仰を礼拝と道徳・倫理から切り離さないことがユダヤ・キリスト教信仰の特徴です。

・聖なる山 礼拝場が幕屋から神殿へ、そして神殿の部分的崩壊から国外捕囚へと変化したとき、何が変わり、何が変わらなかったのでしょうか？ 「聖なる山」はエルサレム神殿が立つシオンの丘？ 北イスラエルにとってはサマリアのゲリジム山でしょうか？ 人が時間と空間に生きる以上、礼拝の「場」は大切です。しかし、キリスト者の「聖なる山」、神と人を出合わせる場はイエス・キリストであり、その体である教会の礼拝です。詩人には、神との親しい交わり、臨在・会見が重要であり、至福の時であつたのでしょうか。まず、先頭で、「主よ」と呼びかけています。「宿る」(ヤーグル グル)とは客としての一時的逗留、「住む」(イシェコン シャーコン)はそこに「同居人として永住すること」。イエス様に、そのように恋しい想いを持っていますか？

・私たちの行動、心、言葉は主なる神に向かっていますか？ 詩編は、肯定的振る舞いと否定的な振る舞いについて述べています。神の臨在を喜べる人とは、「完全な道を歩き」(ホーレイク=ハーラーク ターミーム)は終わりに達していること、終末論的希望に生きることです。フィリピ 3:12 参照。正しいことを行う人(ポエル ファーアル ツェデク(義)を働く)です。心からの信実(エメト アーメン)を語ります。「歩む」「行う・働く」「語る」人の基本的動作です。

・舌を制すること、友を大切にすること 神と個人のあり方だけではなく、隣人との関係を重視します。共同体形成なしに個はなく、個なしに共同体もありません。舌で、ラーガル=誹謗して歩き回ることをしない。参照ヤコブ 3:1-12. マタイ 10:11. 友に災いをもたらさず、親しい人を嘲らないこと。人(友)を「利用関係」でしか考えない人もいます。利用関係がなくなっても留まる人こそ真の友です。まして、友に災いをもたらさず、「隣人に非難をかぶせない」(ロー ナーサー=友の上に負わせない、被せない)人。非難は進んで自らに受け留めること。

・主を畏れる人を尊ぶ 4 節の「主の目」は「その目」とも翻訳可能。卑しむべき者を軽蔑し、たとえこの世的に名誉があり金があつてもハンサムでも、野卑な人を評価せず、主を畏れる人を尊重すること。己を害しても誓い・約束を変えない人。口語訳の方が良い。

・利息を取らず、賄賂によって罪のない人を陥れない人。ユダヤ人は一種の二重倫理で、外国人からは利息をとって良いが、同胞からはいけなかつたらしい。収賄事件が絶えない日本社会。

・とこしえに(レオラーム)揺らぐことがない 通常信仰者は、非信仰者と違わないが、他者が揺らぐ時にも揺らがない。まあ、少しは揺らいでも良いかな？